

平成三十年度

豊島岡女子学園中学校

入学試験問題

(二回)

国語

注意事項

- 一. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二. 問題は□から□、2ページから18ページまであります。
合図があつたら確認してください。
- 三. 解答は、すべて指示に従って解答らんに記入してください。

□ ① 次の文章を読んで、後の一から八までの各問いに答えなさい。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

私が絵本を心理学的な視点より研究対象とし始めたのは、今から約40年前のことです。動機はいたって単純で、「幼児の言葉の発達や概念Aケイセイに及ぼす絵本の読み聞かせの効果」といった類の出發でした。しかし、①この発想は研究が進めば進むほど浮薄なものであることが分かりました。

この類の視点は現在でもマスメディアなどの風土にすっかりと息づいており、赤ちゃんに絵本を手渡す「ブックスタート」運動の広がりや、「読解力の低下」問題がささやかれ始めると再び浮上してきました。私は、この視点がまったく間違っていると言いつもりはありませんが、この発想はすぐに底が見えてくるものなのです。なぜならば、「絵本を読む」という前提には自分や他者の心を読んだり、日常生活の中で生じるさまざまな事象を読み解いたり、さらには人間関係の複雑さも経験し読みとる力がなくてはなりません。子どもと絵本を「効果的に」出合わせるといった表層的な発想では到底研究は無理で、この視点はすぐに行き詰まってしまうました。

研究を進める中、たくさんさんの絵本を読み続けるうちに子どもの発達と絵本の関わりを考える上で、徐々にいくつかの異なった視点が見えてきました。それは、優れた絵本作家の描く「子ども」を繰り返し読み込んでみると、その心理分析の斬新さに「②」ほど感動することがたびたびあったからです。作家・画家が描く子どもはあくまでも個としての子どもですが、さまざまな発達のBフシメを描いた絵本の中で、③子どもの経験の意味が深層の淵から引き上げられ、驚くような日常的な切口で物語られているのに出合うときでした。

たとえば、幼い子どもの空想遊び(ごっこ遊び)は、想像力の発達や現実社会のさまざまな知識や技術の習得、社会性の発達などに大きな影響を及ぼすことが実験や観察などを通して部分的には検証されています。しかし、幼年時代の遊びや生活体験の記

憶おくを生き生きと内面世界に残し、かつそれらの「子ども」を優れた芸術家（画家・作家）が絵本として絵や文章に表すと、そこには断片的な実験や観察ではとうてい捉とらえることのできない子どもの発達の姿が深く説得力をもつて描えがかれていたのです。

それは一般的いっぱんてきには「語り」という脈絡みやくらくの中で展開されるために、実験や調査などで収集される「今・ここ」に現れている行為や反応の部分のみに限られるものではないからです。物語することは、それらの行為や反応の背後にある矛盾対立する深層の心理構造や、そこへ至る心理的プロセスを過去の事実から未来の予測をも含み描くことを可能にします。

センダックは、『かいじゅうたちのいるところ』（センダック作／じんぐうてるお訳／富山房）で、大暴れをしてお母さんに晩御飯ごはんぬ抜きで寢室しんしつに放り込まれたマックス少年の空想遊びの世界を、その見立ての根拠こんきよ等も明瞭めいりょうに示して完璧かんぺきに近い作品として創り上げています。ドアやベッドの縁みちが木の幹に変身し、窓際に置いてあるテーブルと花瓶かびんは同じ形の茂みへと見事に見立て（変換かん）られています。絨毯じゅうたんや天井てんじょうはどうでしょうか。ページをめくる度に、マックスの空想遊びの努力の痕跡こんせきが見られます。アニメーションならば変身・変化はCジザイですが、二次元の絵の世界でここまで描くことは、よほど子どもの内面世界を知る画家でないと出来るものではないでしょう。

『おねえさんになるひ』（C&L・アンホルト／吉上恭太よしがみきょうた訳／徳間書店）では、弟が誕生して姉となった一女兒が、父母が弟にばかりかまけるのに腹を立て、「もう あかちゃんなんか、どっかいっちゃえ！」と、雪の庭に出て大泣きをします。その時、お父さんは、彼女かのじょをぎゅつと抱きしめ、「ソフィーのきもち、よくわかるよ。④おねえさんになるってたいへんだね」と、話しかけます。

ほんの2例ばかりですが、前者の絵本は空想遊びをするときの幼児の内面世界の構造を的確とくに捉え絵画化していますし、後者は弟妹が誕生したときの子ども心理を巧みに描写しつづつ、その時の父親のとりうる態度への大いなる示唆しそも含まれています。

優れた画家や作家は、子どもたちの日常生活の中で発生するさまざまな葛藤かつとんを通して、発達における重要なテーマを物語という形式で写實的に、またある時には象徴しょうちゆうてき的に描えがいています。私は、これら芸術家たちの「語り」の巧みさと、そこから生じる深い

*4とらさつ
洞察と解釈に共感しつつ、いつも深い子ども理解へと導かれます。

赤ちゃんと絵本を結びつける「ブックスタート」運動が始まってから、私はいくつもの赤ちゃん発見を経験しました。従来であれば、子どもがはじめて出会う絵本としては「ものの絵本」が一般的であったのですが、赤ちゃんは⑤それ以前にもっと楽しめる絵本を発見し手元に引き寄せ始めたのです。

具体的には、長新太の『ちへいせんのみえるところ』（ビリケン出版）などの「ナンセンス絵本」に0・1歳児がとても惹きつけられる場合がそうなのですが、このようなケースを数多く見るたびに、その意味を考え続けていました。そんなとき谷川俊太郎が自ら描いた『もこ もこもこ』（たにかわしゅんたろうさく／もとながさだまさえ／文研出版）を取り上げつつ、この絵本がおとなよりも幼い子ども達によって強く支持されている理由を次のように述べているのに出会いました。

「それら（絵本：筆者注）は必ずしも子ども時代を描いたものではありませんが、大人たちの頼る「意味」の世界に対して、意味以前の「存在」の手ざわりを絵と言葉を通して表現しているのではないかと自負しています。（中略）絵本を認識のためのひとつのてでと考えるとき、絵本のもたらずイメージとヴィジョンは言葉のもつ意味を超えて子どもたちに、そして大人たちにも訴えかけると私は信じています」（別冊太陽 2003 129号 8頁）。

最初の見開きには紫色の地平線があり、「しーん」という文章のみが右上にあります。さて、二つ目の見開きにはその地平線から「もこもこ」とふくれ上がる、黄色みを帯びた柔らかい半円形の物体と、「によき」と小さい茸のような形が現れます。あとは、これらのチューインガムのような風船のような形の物体が、ページをめくるたびに「もこもこ」、「もぐもぐ」、「ふうつ」、「ぎらぎら」、「ぱちん！」と壊れ、「ふんわ ふんわ……」と降るように落ちて行きます。そして、最初の見開きと同じ「しーん」の場面が現れて、エンドレスで循環して行くことが暗示されています。

一男児は5か月の頃から、この絵本を読んでもらっていましたが、「しーん」以外の場面でめくるたびに大笑いし、「キューー」と奇声を上げ、手足をばたつかせて全身でおはしやぎ反応をくり返していました。

これら赤ちゃんの好むナンセンス絵本には一つの特徴があります。それは、日本語の音韻・リズム・メロディを生かした⑥オノマトペ（擬声語・擬態語・擬音語など）が巧みに多用されていることです。おそらくは、チョムスキーの提唱するような生得的な言語装置に強く働きかけていると思われる。

絵本といえば物語絵本が中心になるのは、どうしても読み手であるおとなが理解しやすいからでしょう。しかし、美術・造形的な感性を生かした絵本やナンセンス絵本、視覚トリックを生かした絵本など、最近ではさまざまなタイプの絵本づくりが試みられています。それゆえ、以前には存在しなかった絵本が乳幼児の前に差し出され、「どうしてこんな絵本が好まれるのだろう」というおとなの反応をしばしば見聞きます。乳幼児の絵本の読みの発達が、「ものの絵本」や「生活絵本」からはじまるという従来の考え方は、新しい絵本の出現とともに修正の時期にきていると言えます。

⑦子どもの心を理解するためのメディアとしての絵本は、このように大きく分けて二つの側面があることが分かります。一つは、内なる子どもを生き生きともつ作家・画家による子どもの描写です。もう一つは、新しい試みの独創的な絵本が拓く今まで知られていなかった子どもの内面世界の存在です。それは作家自身にも予測できなかったことが多く、まさに子ども自身が取り込み、表現することで見えてきたことなのです。

（ 「子どもの心を理解するために―絵本の心理学」 佐々木 宏子 ）

〔注〕 *1 マスメディア⇨新聞・雑誌・ラジオ・テレビ・インターネットなどの情報を大衆に伝達する仲立ちと

なるもの。

*2 プロセス⇨進行の段階。過程。 *3 示唆⇨それとなく教え示すこと。

*4 洞察⇨物事をよく観察し、その本質を見抜くこと。

*5 チョムスキー⇨アメリカの言語学者の名前。

問一 ―線 A 「ケイセイ」、B 「フシメ」、C 「ジザイ」のカタカナを正しい漢字に直しなさい。(一画一画ていねいにはつきりと書くこと。)

問二 ―線 ①「この発想は研究が進めば進むほど浮薄ふはくなものであることが分かりました」とありますが、その説明として、最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア マスメディアが正しいと信じている、幼児の時から絵本に触れさせることで読解力が向上するという考えは、心理学的研究においてなんの根拠こんきょもない、架空かくうの考えであることがわかった。

イ 子どもたちの読解力の向上に絵本の読み聞かせが効果的とされてきたが、実際には小学生以上の本離れほんばなが進み、読み聞かせには何の効果もなく、人々が期待しすぎていたことがわかった。

ウ 日常の中でたくさんの人に出会い、さまざまな経験を重ねる方が読解力の向上には効果的であり、幼い時から多くの本に触れさせることに意味を求めるのは誤りであることがわかった。

エ 読解力の向上に必要な心情を読み解く力や日常の様々なことを経験する大切さを学ばせることに着目せず、絵本の読み聞かせの効果にばかり期待するのは浅はかであることがわかった。

オ 絵本を読み聞かせて多くの本に触れさせても効果はなく、読解力の向上のためには、生活の中で生じる出来事や人々の心の動きを読み解く力の重要性を無視するのは愚かおろであることがわかった。

問三 空らん「②」に入る語として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息をこらす イ 息がはずむ ウ 息が合う エ 息がかかる オ 息をのむ

問四 ―線 ③「子どもの経験の意味」とありますが、どのような意味だと考えられますか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 空想遊びを通し、現実社会で生きるために必要な知識や技術を習得することで、社会性を身に着けるという意味。

イ 幼少期の遊びを通し想像力を養うことで、不測の事態にも対応しうる力を身に着けることができるという意味。

ウ 日々の生活で生じる様々な感情を経験することで、困難に立ち向かうことができる人に成長するという意味。

エ 自分の行動や反応の裏に潜む自己の矛盾する心理や心の変化を通して、子ども自身が心的に成長していくという意味。

オ 子どもの日常の中に潜む心理的過程を細やかに追うことで、大人に対して思いを表現できるようにするという意味。

問五 —線④「おねえさんになるってたいへんだね」と言うことでソフィーの父親は何をソフィーに伝えようとしているのです

か。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 弟の存在に対してのソフィーの戸惑いを理解していることをソフィーを抱きしめることで表現し、弟に対しても優しく接するようにしてほしいと伝えようとしている。

イ 父母の愛情がほしいがために弟に対し腹を立てていたソフィーの気持ちに寄り添っていると示すことで、ソフィーも大切な存在であることを伝えようとしている。

ウ 弟の誕生を喜ばねばならないとプレッシャーを感じているソフィーの思いに理解を示すことで、弟の存在を受け入れるまで両親は彼女を見守るという姿勢を伝えようとしている。

エ ソフィーが弟を大切にできない自分を責めて大泣きしていることを理解し、ソフィーはそのままでも弟思いの優しいお姉さんであるということを伝えようとしている。

オ 母親に対し甘えたい気持ちがあるにもかかわらず、ずっと我慢していたソフィーの思いを理解し、彼女のことも母親は大切に思っていることを伝えようとしている。

問六 —線⑤「それ以前にもっと楽しめる絵本」とありますが、どのような絵本ですか。「絵本」につながるよう、三十字以内で

探し、最初の三字を抜き出しなさい。

問七 ー線⑥「オノマトペ」(擬声語・擬態語・擬音語など)について、後の問いに答えなさい。

(1) 本文における「オノマトペ」の説明として、ふさわしくないものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア オノマトペとは、日本語の音韻おんいんやリズム、メロディを生かしたものである。

イ オノマトペとは、乳幼児は強く心惹こみひかれるが、大人にはわかりにくいものである。

ウ オノマトペとは、読み手に作品の伝えたいメッセージを推測させるものである。

エ オノマトペとは、人間に先天的に備わっている言語感覚を刺激しげきするものである。

オ オノマトペとは、物語の持つイメージを大人にも伝える可能性があるものである。

(2) 擬音語を次のア～カの中から全て選び、記号で答えなさい。

ア ざあざあ イ きらきら ウ かたかた エ うろうろ オ いらいら カ のびのび

問八 ー線⑦「子どもの心を理解するためのメディアとしての絵本」とありますが、その特徴はどのようなものですか。本文全体をふまえて、百字以上百二十字以内で書きなさい。

□ 高校一年生の「私」は、百キロの道のりを三十時間以内に歩く「三河湾チャリティー100km歩け大会」という行事に参加し

ていますが、雨にも降られ、体力は限界を迎むかえていました。以下はそれに続く場面です。後の一から八までの各問いに答えなさい。なお、作問の関係上、一部省略した所があります。

(ただし、字数指定のある問いはすべて句読点・記号も一字とする。)

六十キロのチェックポイントにたどり着いたときは、放心状態で、なにも考えられなかった。気がついたら雨はかなり小雨になっていたけれど、そんなことにも気がつかなかった。コンビニの明かりと①オレンジの服が見え、ふらふらとそこへ近づくと、だれかになにか話しかけられたけれど、よく覚えていない。

目についた椅子に、吸い寄せられるように座った。ずっと地面にばかり座っていたから、パイプ椅子ですらありがたかった。これで布団があったら絶対に倒れ込むのに。そう思っていたら、目の前に、バスがあった。

しばらくそのバスをぼーっと見ていたら、乗っていく人がいた。それをさらに眺めているうちに、気づく。

そっか、これ、リタイヤ車だ。時計を見たら、六十キロのチェックポイントが閉まる、三十分前だった。タイムアップになった人に乗せるため、待機しているのだろう。吸い寄せられるようにして、一人、また一人と、タイムアップを待たずにリタイヤを決めた人たちがそのバスに乗っていく。

バスの中は、あたたかそうだった。雨にもぬれずにすむし、ふかふかの椅子があり、眠っているうちにゴール地点の温泉まで運んでくれる、「②」のような場所。それになにより、あれに乗りさえすれば、もう歩かなくてすむんだ。こんな苦しい思いなんてしなくてすむ。刺すような痛みに耐えながら、足を踏み出さなくなっていたいいんだ……。

無意識のうちに立ち上がったとき、声をかけられた。

「あなたの番だろ、呼ばれてんぞ」

「……え……？」

急に現実引き戻され、すぐにはなんのことかわからず、声をかけてきた人を見る。そこには仏頂面の少年がいた。私が座っていた椅子の隣に座ったまま、私を見上げている。

「マッサージ、並んでるんだろ」

「マッサージ？」

少年の示したほうを振り返ると、確かに人が並んで寝ころんでいた。我に返ってあたりを見回し、私が休憩のために座ったパイプ椅子は、実はマッサージコーナーに背を向けるように並べられた、マッサージ待ちの人のための椅子だったことに気づく。

「私は……」

「おねえさん、こっちだよ！」

あのバスに乗るつもりなんだと言おうとしたとき、マッサージコーナーの中から、一人が立ち上がって私を呼んだ。

「早く！ 待ってる人大勢いるんだから」

声にせかされ、わけもわからぬまま、寝転がる人たちの足元を移動して、その人のもとまで行く。見ると、私を呼んだのは、かなりいかついおじさんだった。

(中略)

「太ももの筋肉はそう固まってないから、あと百キロはいけるで」

「うそだあ」

「百キロは言いすぎやけど、五十キロはいける」

私が思わず声を上げると、おじさんはニヤツと笑った。仰向けになると、今度は足を折りたたむように曲げ、ゆっくりと押してくれる。太ももの裏が伸びていくのを感じる。右足の次は、左足。

「あんた、ひとりで歩いてんの？」

「はい」

答えるとき、③泣きそうになる。不意打ちで孤独を確認してしまったようだ。

「わしも去年ひとりで歩いたわ。本当につらいのはこっからよ」

「はい」

もう十分つらい、と思いつつながら相槌あいづちを打つ。これ以上ないくらいつらい。本当はリタイヤしたい。でも次の一言で、そんなこと言えなくなった。

「わしが今あと四十キロ歩けるようにしてやるから、あんた絶対完歩しなさいよ」
なにも言葉が出なくなる。なぜ今会ったばかりの他人の私に、ここまでしてくれるのだろう。今にもあきらめかけている私に。リタイヤしてバスに乗る直前だった私に。どうして。

当の歩いている本人より、この人は私の完歩を信じてくれている。

(中略)

マッサージが終わり、立ち上がる。すると、驚おどろくほど足が軽くなっていた。あんなに苦しかった屈伸くつしんが、なんの支えもなく楽にできる。魔法まほうにかかったみたいだ。

すごい。おじさんの四十キロ歩けるようにしてやるって言葉も、嘘うそじゃないのかも。

「ありがとうございます！」

足の裏の痛みは格段に減っていた。太ももの痛みも。

感動して、心底お礼を言うと、おじさんはまたニツと笑った。

「悪いことは言わんからわしの言うこと聞いとき。ゴールで待ってるから」

「はい」

(中略)

体がまた寒さで固こまってしまいう前に、出発しゅつぱつすることにした。コンビニを去り際、④オレンジの服の人に、がんばってくださいと言われ、その人にも会あい積あをし、歩あきだす。

次のチェックポイントは六十八キロ。時間の余裕よゆうはそんなにない。地図をちらっと確認し、最初のコンビニを手近な目標にして、

歩きだした。

それから一時間ほど、音楽を聴きながら、かなりのハイペースで歩いた。途中コンビニがなかったため、一度も休憩しなかった。すぐにコンビニがあるだろうから、コンビニに着いたらなにか甘い物でも買って休憩しよう。なに買おうかな、などと考えながら、そのまま歩き続ける。

かなりの距離を歩いたとき、やっとコンビニの光が見えた。缶でもいいからお汁粉を飲もうとのんきに考えながら近づいていく。まずは外でリュックを下ろし、確認のために地図を取り出した。

感覚的には、時速四キロペースで小一時間ほど歩いてきた。きつと四キロくらい進んでいるだろう。次のチェックポイントは六十八キロだから、もう半分来た計算になる。この調子でいけばタイムアップにはならないな、そう安心しながら地図を見て、驚いた。

「六十二キロ……?」

思わずその場にしゃがみこんだ。地図のコンビニの位置には、六十二キロという無情な数字が書いてあった。

「なにそれ信じらんない」

思わずつぶやく。雨で地図がぬれているせいで見間違えたのかもしれないとまで考え、必死で確認したけれど、そこにはなんとも見ても六十二キロという文字があった。

これだけ歩いたのに。一時間も、休憩なしで、しかもかなり速く歩いたつもりだったのに、進んだのはたったの二キロだったというの？

もう間に合わないかもしれない、という弱気な考えが、またもや頭をもたげた。このペースで歩いても二キロだったら、あと六キロ歩くのに三時間もかかってしまう。今の時刻は午前二時半。六十八キロ地点のチェックポイントが閉まるのは、四時半。あと二時間しかない。もう間に合わない……。

「なんでよ……」

せつかくマッサージしてもらって、歩けるようになったというのに。*くつした靴下を替かえ、靴くつひもを緩ゆるめ、赤信号で止まるたびになりふりかまわず股またわりをしたのに。それでも二キロしか進んでないっていうの。

また泣きそうになる。うつむいた顔が上げられない。座り込んだままで、もう二度と立ち上がれない気さえする。だってまだ二キロ。

もう、間に合わない。

「あんた、寝ひまてる暇ひまあんの」

そのときまた、声が聞こえた。どこかで聞いた声。

のろのろと顔を上げると、さっきのチェックポイントで隣となりに座っていた少年が、なぜか目の前に立っていた。さっきは私が立っていて、椅子いすに座っていた少年を見下ろしていたから気づかなかったけれど、思ったより背が高い。座っていたときはもっと幼いと思っていたけれど、もしかしたら私より年上かもしれない。

「もうそろそろ、時間やばいと思うけど」

なんでこいつ話しかけてくるんだろう、⑤もう放っておいてほしい。心の中だけでつぶやき、ただ見上げる。そいつはそれだけ言うと、目の前から消えた。もう先に向かったのかも知れない。

どうでもいいや、と思った。彼の行方も、百キロも。だってもう、間に合わないじゃない。どっちにしるりタイヤになるなら、もう一步も歩きたくなってる。これ以上つらい思いをするのなんて絶対にいやだ。

また座り込んでうつむいていると、隣となりに人が座る気配がした。ガサガサと動いている。そのうち、ブツブツと独り言が聞こえた。

「はあ？ まだ二キロ？ 冗談じやたんだろマジで……」

間違まちがいなく、さっきの彼の声こゑだった。見ると、唐揚げ棒からあをばくばく食べながら、地図なまを眺めている。

「……もう間に合わないよ」

聞こえるか聞こえないかくらいの声で、言った。

「まだ二キロだよ。もう二時半だよ。いつくら急いだって、もう絶対間に合わないって」

今度は、さっきより少し大きめの声で。彼は時計と地図を見比べながら、唐揚げを食べ続けた。よくそんなもの食べられるなど感心しながら、そんな彼を眺める。彼はさんざん見比べたあと、言った。

「……絶対この地図間違ってる」

「なんでそう思うの」

思わずそう聞き返してしまう。唐揚げ棒はあつという間にただの棒になってしまった。次に彼は袋をあさり、サンドイッチを取り出した。こんな真夜中に、いったいどれだけ食べるんだろう。

「このペースで一時間歩いて、二キロなんてことはない。俺はこの地図より、俺の感覚を信じる」

サンドイッチを口いっぱい頬張ったせいで、多少、いやかなりもごもごしてはいたけれど、そいつははっきりと、そう言いきった。⑥私は何も言えなくなる。

私だってそう思ったよ。私だってそう思ったんだってば。

でも私は、自分を信じられなかったんだ。……そして、完歩の夢をあつさり手放した。

『俺は俺を信じる』なんて、人生で一回も言ったことがない。そんな自信、持ったことなんてない。ママはいつでもそれを信条に生きていたけれど、結局私は今までの人生で一度だって自分を信じられなかった。

でも、いいかげん変わりたい。私だってそう思ってる。

変わるなら、今がその時なんじゃないの。

私は立ち上がった。先を急ぐためだ。

⑦地図が合っているかどうかなんて問題じゃない。問題は、歩くか、歩かないかだ。

そして私は、歩くと決めた。

(『明日の朝、観覧車で』 片川 優子)

〔注〕＊ 靴下を替え、股わりをした。中略した場面で、「私」は「おじさん」からマッサージを受けていた時に、これらをするようにすすめられていた。なお、「股わり」はストレッチの一種。

問一 ―線①「オレンジの服」、―線④「オレンジの服の人」とありますが、この人やその周辺の人たちへの対応から「私」についてわかることとして最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ―線①での「私」は疲れきっていて対応できたかわからないが、―線④での「私」は「オレンジの服の人」に会釈をしている。このことから、「私」がマッサージを経て、体力だけでなく精神面においても余裕を得たことがわかる。

イ ―線①での「私」は話しかけられた内容を聞き取れてすらいないが、―線④での「私」は「オレンジの服の人」の声かけに対して会釈している。このことから、「私」がマッサージによって、はっきりとした意識を取り戻したことがわかる。

ウ ―線①での「私」は疲労のせいで何も受け答えできていないが、―線④での「私」は「オレンジの服の人」に会釈で対応している。このことから、「私」がマッサージのおかげで、残りの道を歩けるほどに体力が回復したことがわかる。

エ ―線①での「私」は無我夢中で歩き周囲に目を向けなかったが、―線④での「私」は「オレンジの服の人」に丁寧に会釈している。このことから、「私」が「おじさん」の優しさに触れ、他人に優しくできるようになったことがわかる。

オ ―線①での「私」は疲れのせいで話しかけられたことを覚えていないが、―線④での「私」は「オレンジの服の人」に会釈している。このことから、「私」が「おじさん」に励まされ周囲に気を配るゆとりを持てるようになったことがわかる。

問二 空らん「②」に当てはまる語として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 我が家 イ 異世界 ウ 夢 エ ふるさと オ おとぎ話

問三 —線③「泣きそうになる」とありますが、なぜ「私」は「泣きそうにな」ったのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」が独りで歩いていることは明らかなのに、「おじさん」がわざわざ聞いてきたことに堪えられなくなったから。

イ 「私」が独りで大丈夫なのかと心配している「おじさん」は、自分を子ども扱いしているとわかり、悔しくなったから。

ウ 「おじさん」のマッサージが終われば、これから「私」はまだ独りで歩いていくのだと気づき、むなしくなったから。

エ 「おじさん」とのやりとりの中で、「私」は残りの道はまだ長いという現実を再び思い出してしまい、悲しくなったから。

オ 「おじさん」からの質問に答えたことで、「私」が独りであることを改めて自覚することになり、寂しくなったから。

問四 本文中の□で囲まれた十九行「感覚的には、くもう、間に合わない。」という状況の中で描かれる「私」の心情の変化を九十字以内でまとめなさい。

問五 —線⑤「もう放っておいてほしい」とありますが、ここから読み取れる「私」の様子として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どんなに励まされてもこれ以上歩く気力はないので、何も言わずにそっとしておいてほしいと少年に切望している様子。

イ 地図を見たことで一気に押し寄せてきた後ろ向きな感情によって、氣遣ってくれた少年と会話を余裕もない様子。

ウ 間に合わないと弱気になっているところに、追い打ちをかけるような話をしてきた少年をうっとうしく思う様子。

エ 自分では完歩できないとわかっているのに、少年が空気を読まず無神経に声をかけてきたので腹を立てている様子。

オ もう一歩も歩けないとあきらめていたところに、急がなくていいのかと話しかけてきた少年をわずらわしく思う様子。

問六 ―線⑥「私は何も言えなくなる」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 地図よりも自分を信じるべきだという少年の考えは正しいと反省したから。

イ 少年が何の根拠もなく自信たっぷりでいられることをうらやましく思ったから。

ウ あきらめずに自信を持ち続ける少年を見て、あきらめかけた自分を悔しく思ったから。

エ 強い意志を持った少年の言葉を受けて、自信もなく弱気である自分に気付かされたから。

オ 少年と自分は価値観が異なるので、分かり合えることはないとあきらめたから。

問七 ―線⑦「地図が合っているかどうかなんて問題じゃない。問題は、歩くか、歩かないかだ」とありますが、どういうことですか。最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が次のチェックポイントに到達できるかどうかは、地図が合っているかどうかによって決まるのではなく、歩くか歩かないかの選択によって決まるということ。

イ 地図が合っているかどうかは自分にとっては大したことではなく、本当に重要なのは、自信を持てるようになるために歩ききることなのだということ。

ウ 自分たち参加者にとって、この場所の地図が合っているかどうかは些細なことささいで、重大なのはあきらめない自分に変われるかどうかなのだということ。

エ 地図が合っているかどうかは自分を変えてくれるきっかけにはならず、最後まで歩き通すと決意することこそが自分を変えてくれるきっかけになるのだということ。

オ 地図の示した道を歩いてきたことが自分の自信になるわけではなく、歩くか歩かないかの選択せんたくによって自信を持てる自分になるのだということ。

問八 「私」についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どんな困難な状況であつたとしても、自分自身を信じてきつと成功するという強い思いを持ち行動することができるような意志の強い面がある。

イ 自分がつらい状況にあつても他人に対しての思いやりを忘れることがないところや、自分のことを後回しにしてしまうような優しい面がある。

ウ 思いと現実が異なるとすぐにあきらめてしまいそうになるところもある一方で、苦しくても自分なりに状況をよくしようとする努力家な面がある。

エ 自分が追い込まれた状況にあつたとしても、他人の話に耳をかたむけて自分の行動をかえりみることできるような向上心の旺盛な面がある。

オ 自分にとって不利な状況になるとすぐに周囲のせいにし、何かと理由をつけてその状況から逃げ出そうとするような後ろ向きな面がある。

※のらんには記入しないこと

座席番号
—
受験番号
1 2

氏名

問一
A
形成節目
B
自在
C

問二
工
問三
才
問四
工
問五
イ

問六
意味
以
問七
(1)
ウ
(2)
ア・ウ

問八							
か	か	置	と	す	す	家	内
れ	に	に	、	る	る	・	な
て	な	働	オ	子	さ	画	る
い	る	き	ノ	ど	ま	家	子
る	、	か	マ	も	ざ	が	ど
こ	子	け	ト	の	ま	、	も
と	ど	る	ペ	姿	な	日	を
。も	こ	が	を	葛	常	生	生
の	と	生	描	藤	生	き	生
内	に	得	い	を	活	生	生
面	よ	的	て	通	の	き	き
世	っ	な	い	し	中	と	と
界	て	言	る	て	で	も	も
が	明	語	こ	成	発	つ	つ
描	ら	装	と	長	生	作	作

問一
ア
問二
ウ
問三
オ

問四					
合	な	い	ッ	り	初
わ	か	た	プ	の	め
な	っ	が	に	距	は
い	た	、	な	離	周
と	こ	実	ら	を	囲
絶	と	際	な	進	の
望	が	は	い	ん	助
し	わ	ほ	だ	だ	け
て	か	と	ろ	の	の
い	り	ん	う	で	お
る	、	ど	と	、	か
。も	進	安	タ	げ	げ
う	ん	心	イ	で	で
間	で	し	ム	か	か
に	い	て	ア	な	な

問五
ウ
問六
エ
問七
イ
問八
ウ

12×1
12

5点×7
35

12×1
12

5点×7
35

2点×3
6

得点
100